〈幼稚園　言葉〉

自分の思いを言葉で伝え合う幼児の育成

－　心を動かされる体験を通して　－

浦添市立　神森幼稚園　　東　真紀子

目　次

Ⅰ　テーマ設定理由 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

Ⅱ　目指す幼児像 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

Ⅲ　研究の目標 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

Ⅳ　研究仮説 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

1　基本仮説 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

2　作業仮説 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

Ⅴ　研究構想図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

Ⅵ　研究内容 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

1　幼児期の言葉の発達について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

2　心を動かされる体験とは ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

3　言葉で伝え合う幼児を育むための教師の援助 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

4　言葉で伝え合う幼児を育むための環境構成 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

Ⅶ　保育実践 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

1　題材名 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

2　ねらい ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

3　題材について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

4　検証保育の全体計画 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

5　本時までの遊びの様子 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

6　検証保育（本時） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

Ⅷ　研究の考察 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

1　作業仮説(1)の検証 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

2　作業仮説(2)の検証 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13

3　本研究を通して ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15

Ⅸ　研究の成果と課題 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16

1　成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16

2　課題 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16

おわりに ・・ 16

主な参考･引用文献 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16

自分の思いを言葉で伝え合う幼児の育成
ー 心を動かされる体験を通して ー

浦添市立神森幼稚園　東　真紀子

【要　約】

本研究は，自分の思いを言葉で伝え合う幼児の育成を目指し，言葉で伝え合う喜びを味わえるような環境構成や教師の援助の工夫を試みたものである。

キーワード　□言葉による伝え合い　□視覚的教材や絵本の活用　□諸感覚を働かせるような体験
□安心して話ができるような教師の援助　□言葉で伝え合う喜びを味わえるような環境構成

Ⅰ　テーマ設定理由

近年，少子化や情報化など社会状況が変化する中で，人間関係の希薄化やコミュニケーション力の低下などが懸念されている。コミュニケーションの手段としては，様々なゲームやスマートフォンなどの急速な普及により，直接的に人が言葉を介して伝え合うことが少なくなっている。子ども達においては遊びを通して言葉を使う機会が減っているため，自分の気持ちを言葉で伝えることが難しい場面も増えてきている。

幼稚園教育要領の「言葉」では，内容（２）「したり，見たり，聞いたり，感じたり，考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する」とあり，そのためには「自分なりの表現が教師や友達，さらには異なる年齢や地域の人々など，様々な人へと伝わる喜びと，自分の気付きや考えから新たなやり取りが生まれ，活動が共有されていく満足感を味わうようにすることが大切である」と明記されている。また，改定にともない示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の一つに（９）「言葉による伝え合い」と明確化されており，小学校教育との接続においても推進されている。「言葉」での自己表現は，国語の授業に限らず，生活全般で求められていることであり，幼児期に生活や遊びを通して身に付けていきたいと考える。

本学級の実態として，優しく人懐っこい幼児が多い一方で，寡黙で目で訴える幼児，人前では緊張して言葉に詰まる幼児，トラブルの際に状況説明が出来ずに困ってしまう幼児などが見られ，日常的な会話不足や自信のなさなどが感じられる。

５月に行った実態調査（年長児26名）では，帰りの会の当番挨拶の場面で，教師が「今日楽しかったことは何ですか？」と質問したのに対して，「今日は鬼ごっこをして遊んだことが楽しかったです」などと落ち着いた様子で発表できた幼児が31%，照れた様子で「ブランコ」「砂場」などと答えた幼児が27%，緊張した様子で黙るなどの幼児が35%，答えに困る幼児が７％見られた。４割以上の幼児が言葉に詰まる様子から，緊張感や不安を和らげる必要性と，「伝えたい」思いを育む遊び環境の工夫の必要性があると捉える。そこでは「気持ちが伝わる嬉しさ」や「言葉にする喜び」を感じる体験を重ねることが大切であると考える。また，文字の読み書きが未熟な幼児にとって，視覚的教材や絵本の活用，諸感覚を働かせるような体験などが，興味や意欲を引き出すのに効果的であり，心を動かされ「伝えたい」という思いにつながるのではないかと考える。

そこで本研究では，「伝え合う幼児」を「自分の思いを話したい，相手の話を聞きたいと感じ，言葉で伝えられる幼児の姿」と捉え，一斉活動からグループ活動へと遊びの場面を展開しながら，幼児一人一人が安心して話ができるような教師の援助や，言葉で伝え合う喜びを味わえるような環境構成の工夫をすることによって，自分の思いを言葉で伝え合う幼児が育つであろうと考え，本テーマを設定した。

Ⅱ　目指す幼児像

イメージを膨らませ，思いを伝え合いながら遊ぶ幼児

Ⅲ　研究の目標

自分の思いを言葉で伝え合う幼児の育成を目指して，言葉の発達の段階を踏まえ，伝えたい思いを育み，友達との言葉のやり取りを楽しめるような環境構成や教師の援助の工夫について研究する。

Ⅳ　研究仮説

1　基本仮説

一斉活動からグループ活動へと，遊びの場面を展開しながら，幼児一人一人が安心して話ができるような教師の援助や，言葉で伝え合う喜びを味わえるような環境構成を工夫することによって，自分の思いを言葉で伝え合う幼児が育つであろう。

2　作業仮説

(1) 一斉活動の場において，幼児の期待感や好奇心を育むような環境構成の工夫をすることによって，思い思いに自分のイメージを伝えることや，教師や友達に自分の思いが受け止められる喜びを味わうことができるようになり，「伝えたい」思いを育むことができるであろう。

(2) グループ活動の場において，幼児との信頼感や安心感を育むような教師の援助を工夫することによって，友達同士で認めたり折り合いをつけたりしながら言葉でのやり取りの楽しさや，共感し合う喜びを味わうことができるようになり，自分の思いを言葉で伝え合う幼児が育つであろう。

Ⅴ　研究構想図

《目指す幼児像》
イメージを膨らませ，思いを伝え合いながら遊ぶ幼児

《研究テーマ》
自分の思いを言葉で伝え合う幼児の育成
― 心を動かされる体験を通して ―

《研究の目標》
自分の思いを言葉で伝え合う幼児の育成を目指して，言葉の発達の段階を踏まえ，伝えたい思いを育み，友達との言葉のやり取りを楽しめるような環境構成や教師の援助の工夫について研究する。

《研究仮説》

《基本仮説》
一斉活動からグループ活動へと，遊びの場面を展開しながら，幼児一人一人が安心して話ができるような教師の援助や，言葉で伝え合う喜びを味わえるような環境構成を工夫することによって，自分の思いを言葉で伝え合う幼児が育つであろう。

《作業仮説１》
一斉活動の場において，幼児の期待感や好奇心を育むような環境構成の工夫をすることによって，思い思いに自分のイメージを伝えることや，教師や友達に自分の思いが受け止められる喜びを味わうことができるようになり，「伝えたい」思いを育むことができるであろう。

《作業仮説２》
グループ活動の場において，幼児との信頼感や安心感を育むような教師の援助を工夫することによって，友達同士で認めたり折り合いをつけたりしながら言葉でのやり取りの楽しさや，共感し合う喜びを味わうことができるようになり，自分の思いを言葉で伝え合う幼児が育つであろう。

《研究内容》
1　幼児期の言葉の発達について
2　心を動かされる体験とは
3　言葉で伝え合う幼児を育むための教師の援助
4　言葉で伝え合う幼児を育むための環境構成

保育実践・評価

研究のまとめ・成果と課題

Ⅵ　研究内容

1　幼児期の言葉の発達について

(1) 言葉の始まりと伝えたい思い

金子・吾田（2011）は，「生まれた時から自己表現は始まっており，まだ言葉を話せない赤ちゃんでも，非言語的コミュニケーションを行っている」と述べている。泣くことで甘えたい気持ちや不快感などの自分の思いを伝えようとしており，保育者がその思いに応え安心させたり，語りかけたりすることで，次第に喃語が始まり，「マンマ」などの意味のある言葉を話し始めるようになっていく発達の過程を示している。

以上のことから，赤ちゃんが抱く「伝えたい思い」を成長と共に「言葉」へと変えていくには，対話する相手が重要であり，人と人とのかかわり合いの中で育まれていくものであると捉える（図１）。

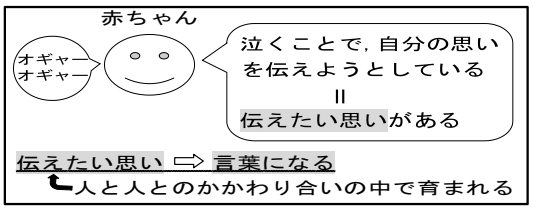


図１　言葉の始まり

(2) 言葉の発達の段階

人とのかかわり合いを友達とのかかわり合いの面から捉えると，３歳では友達と場所を共有して遊ぶようになり，４歳ではルールを守り集団で遊ぶ楽しさを覚え始め，５歳では仲間同士で話し合ってルールを決め遊びを展開するようになるなどの姿があげられる。このことから，幼児同士の間には言葉の活用が発達の過程において重要な役割を果たすと捉える。

また，金子・吾田（2011）による子どもの発達を参考にして，３歳から６歳までの幼児期の言葉の発達を表１にまとめた。本研究で対象としている５歳児・６歳児の発達の段階からは「自分の思いを言葉で伝える」ことの必要性があると捉える。

表１　幼児期の言葉の発達

	言葉の特徴	例
３歳	・一人称を使うようになり，行動の正当化が始まる ・現在，過去，未来が区別でき，抽象語が理解できる ・「どうして？」を繰り返して知識を増やしていく ・語彙が約 1000 語	・「ぼく」「わたし」 ・「だって・・・」 ・「こんど，〇〇する」 ・「好きな食べ物はバナナ」 ・「どうして手を洗うの？」
４歳	・助詞や接続詞を使い，理由を説明できる ・時間感覚の理解が進み，時間を表す言葉を使い始める ・質問に対して，理由を説明できる ・自分とは違う他者の気持ちが理解できるようになる	・「公園で大きい犬を見たよ」「竹馬に乗ったよ。でも難しかった」 ・「誕生日まであと一週間」 ・「どうして砂場遊びが好きなの？」「楽しいから」 ・「困っているから，貸してあげる」
５歳	・理由をつけて提案できるようになる ・道徳的な考え方をするようになり，人を批判するようにもなる ・話し合って物事を決めるようになる ・語彙が約 2000 語	・「園庭があいているからサッカーをしよう」 ・「人が嫌がることは，やってはいけないよ」 ・約 60%が名詞，約 15%が動詞
６歳	・理屈を根拠にあげながら，説明や提案ができる ・相手や場面に応じて，言葉を使いわける ・語彙が約 3000 語	・「昨日は〇〇さんが鬼だったから，今日は僕がやりたい」 ・大人に対しては大人の話し方を真似したり，赤ちゃんには赤ちゃん言葉を使ったりする

(3) 言葉で伝え合う幼児の姿とは

幼稚園教育要領の「言葉」のねらい（２）では「人の言葉や話などをよく聞き，自分の経験したことや考えたことを話し，伝え合う喜びを味わう」と明記されている。伝えることは，泣いたり身振りや表情で示したりと様々な方法があるが，ここでは「話し」と表記されていることから，思いを言葉にする中で伝え合う幼児を育んでいくことが大切であると考える。また，ねらいからも分かるように「聞くことと話すこと」は同時に行われていると捉えることができ，自己主張も出てくる乳幼児にとって「聞く人・話す人」の相互の関係を理解し受容できるようなかかわりが必要であると考える。

2　心を動かされる体験とは

(1) 言葉と脳の働き

中川（1990）は「言葉を Language（言語）と Speech（音声言語）の二つで示し，話したい内容（Language）を考えるのは脳であり，脳からの指令があって話し言葉(Speech)が産出される仕組みをことばの鎖(Speech Chain)」

と示している。そこでは「刺激は脳の栄養」とし，「十分に体を動かすこと」「話しかけ，相手になってあげること」「実地に経験させること」などの大切さが明記されている。

以上のことから，言葉と脳の働きは直接的なつながりがあり，言葉を促すためには脳へ刺激を与えるような体験が有効であると捉える。中川（1990）による言葉の鎖を参考にして，言葉と脳の働きを次のようにまとめた（図２）。

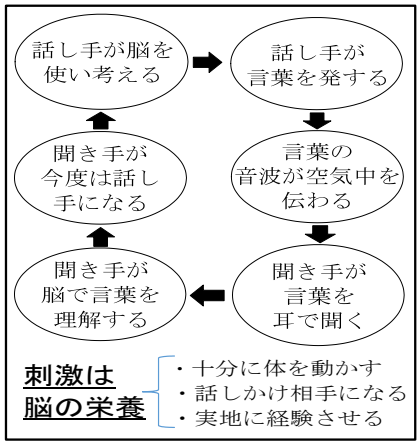


図２　ことばの鎖

(2) 脳と心のつながり

幼稚園教育要領の「言葉」の内容（２）において「幼児は，生活の中で心を動かされるような体験をしたときに，それを親しい人に言葉で伝えたくなる」と明記されている。そこでは，「感動的な体験や感情的な体験，遊びの中での思い付きや気付きなどが心を動かされるような体験である」と述べている。

以上のことから，幼児が感動的な体験をした時などに思わず言葉が出ることは，心を動かされる体験と脳を刺激する体験が同時に起きているものであると捉える（図３）。

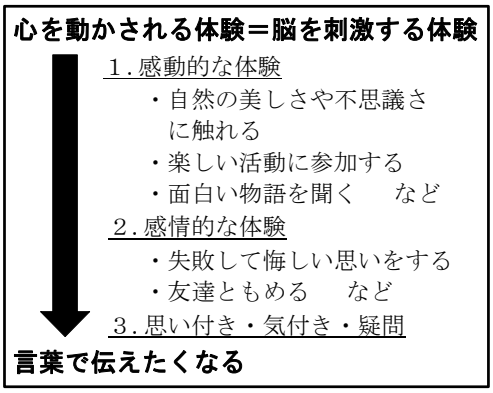


図３　心を動かされる体験とは

そこで本研究では，心を動かされる体験が「伝えたい」思いを育む効果的な環境であると捉え環境構成や教師の援助の工夫に取り組んでいきたいと考える。

３　言葉で伝え合う幼児を育むための教師の援助

(1) 受容的態度

中川（1990）は「大人の側が，子どもの『ことばにならないことば』を読みとる力，子どもの気持ちを受け止める力を，どのくらいとぎすますことができるかが，とても大切です。（中略）大人もことばに対する自分の感度を高めるように，たえず努力をしなければなりません」と述べている。また，幼稚園教育要領の「言葉」の内容（１）では「相手との間に安心して言葉を交わせる雰囲気や関係が成立して，初めて言葉で話そうとするのである」と明記されている。

以上のことから，幼児の気持ちを読み取る力を教師自身が育むためには，普段からの幼児とのかかわりの積み重ねが大切であると考える。また，乳児期に養育者との間で育まれる愛着行動が信頼感や安心感となり発育につながるのと同じく，幼稚園という集団の場におかれた幼児一人一人にとっては，教師の受容的態度が信頼感や安心感を育み，それが心の土台となり，言動につながると捉える（図４）。また，具体的な教師の受容的態度によって育まれる姿を次のようにまとめた（図５）。

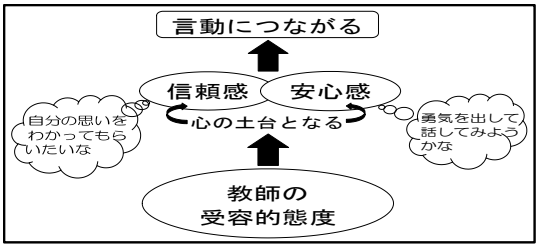


図４　受容的態度と幼児の育ち

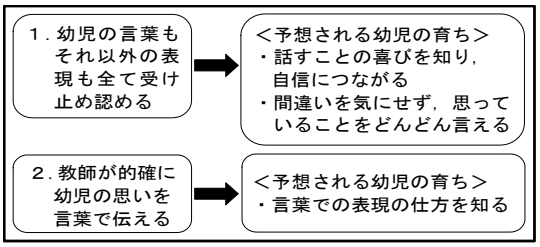


図５　受容的態度によって育まれる姿

(2) 自己肯定感を育む

幼稚園教育要領総則より，幼稚園教育は「安定した情緒の下で自己を十分に発揮することにより発達に必要な体験を得ていくものであることを考慮して，幼児の主体的な活動を促し，幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること」と明記されている。幼児の主体的な活動を促すには，前述した教師の受容的態度によって情緒の安定が図られ，自己発揮できるような自己肯定感を育むことが必要であると考える。

また，元永（2014）は「自己肯定感を育む環境とは，自分の存在を認めてくれる大切な人がいる環境や，自分のことをしっかりとかけがえのない人にほめてもらえる環境が絶対的に重要である」と述べており，幼児の声に耳を傾けるだけでなくその言動を認め，褒めながら自己肯定感を育めるような援助を心がけることが幼児の自信となり伝え合う力につながると考える。

(3) 自由に話せる環境作り

幼稚園教育要領解説「言葉」の内容の取り扱い（二）より「友達同士で自由に話せる環境を構成したり，幼児同士の心の交流が図られるように工夫したりすることで，幼児の伝えたいという思いや相手の話を理解したいという気持ちを育てることが大切である」と明記されている。幼児同士のかかわり合いには共感・共有する楽しい時間もあれば，対立や葛藤が起こることも考えられる。様々な状況がある中で「自由に話せる環境」を構成するには，一番の人的環境である教師が時には見守り時には仲介に入るなど様々な役割を果たしながら遊びを共有することが必要であると考える。また，幼稚園教育要領「人間関係」の内容（８）において「友達と楽しく活動する中で，共通の目的を見いだし，工夫したり，協力したりなどする」と明記されており，「幼児同士の心の交流が図られるような工夫」には共通の目的を持つことが有効であると捉える。

以上のことから，言葉で伝え合う幼児を育むための教師の援助を次のようにまとめた(表２)。

表２　教師の援助

○自己肯定感を育む
・受容的態度で信頼感，安心感を育む
・認める，褒めるなどのかかわりを通して自信を持たせる
○自由に話せる環境構成
・見守る，仲介に入る，代弁するなど様々な役割を果たす
・共通の目的を見出し，実現する喜びを味わえるようにする

4　言葉で伝え合う幼児を育むための環境構成

(1) 好奇心を育む環境の工夫

幼稚園教育要領第１章第４節にて「心を動かされるというのは，驚いたり，不思議に思ったり（中略）様々な情動や心情がわいてくることである。このような情動や心情を伴う体験は，幼児が環境に心を引きつけられ，その関わりに没頭することにより得られる」と明記されている。また，清水（2018）は「人と人とのかかわりの中で言葉を育む時，その過程で楽しさの源になるのは，自分の内側から湧き出てくる好奇心である」と述べている。人は好奇心や期待感で胸がわくわくし，期待通りのことや予想外のことが起こると，その気持ちが思わず声に出てしまうと考える。

以上のことから，好奇心を育めるような環境の工夫を取り入れることで，人が心を引きつけられ没頭するような心を動かされる体験となり，言葉を育むことにつながるであろうと考える。

(2) 言葉とイメージのつながり

関口（1986）は「ことばを使用する人間には，感情，思考，認識などの精神的諸側面がかかわってきます」と述べ，言葉にかかわる原動として８つの側面を示している（表３）。また，幼稚園教育要領において「幼児期の教育は（中略）環境を通して行うものである」と明記されていることからも，幼児のまわりにある様々な側面を認識しながら，言葉における環境を工夫していくことが望ましいと捉える。

表３　ことばにかかわる側面

1.ことばと感情	喜び悲しみなどの感情をことばにするのは難しいことではあるが，子どもが感情を表すことばを使えるようになることは，感情をコントロールする萌芽であり鍵にもなる
2.ことばと興味関心	好奇心と冒険心，探究心は，事物や人とのふれあいから，発見したり知ったりして興味関心を広め深める。そしてそれらをことばで表現するようにもなる
3.ことばと思考	ことばは思考のレベルを示すとともに思考を強化することにもなる。思考を育てることはことばを育てることになり，ことばを育てることは思考を育てることにもなる
4.ことばと認識	子どもは外界の事物について感覚器官を通して知っていくが，次第にそれらをことばで表すようになり，ことばを使って認識するようにもなる
5.ことばと生活体験	ことばは子どもの生活体験が裏打ちされるものであり，様々な生活の反映や生活体験の結果がことばにも出ている
6.ことばとあそび	あそびを夢中に行う過程や結果から様々なことばを獲得し，使用するようにもなる。そしてことばによってあそびが豊かになり発展もする
7.ことばとユーモア	子どもがなぞなぞやだじゃれが好きなのは，ことばの構造を子どもなりに気づいてその不思議さ面白さなどを知るようになるからである
8.ことばとイメージ	**人や事物，動きや活動の中でイメージを描き，イメージに触発されたことを子どもなりのことばに表現したり，逆にあることばからイメージを描き，動いたり活動したりする**

関口（1986）は８つの側面は言葉を育む上で互いに関連し合うものであると捉え，さらに８つめの「ことばとイメージ」においては「イメージはことばの引き金にもなるし，子どものことばの深層的な土台にもなっている」と述べている。このことから，本研究では言葉を引き出すという視点を持ち「ことばとイメージ」から広がる環境構成を考える。そこでは幼児のイメージを生かせる遊びを展開することで，思い付きや気付きから伝えたい思いを引き出し，さらに互いに伝え合うことで，自分の話したことが伝わったときの嬉しさや相手の話を聞いて分かる楽しさを知り，共感し合う喜びを味わうことができるであろうと捉える。

(3) 絵本に親しむことを通して

幼稚園教育要領の改訂により「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の一つに「言葉による伝え合い」が示され，「先生や友達と心を通わせる中で，絵本や物語などに親しみながら，豊かな言葉や表現を身に付け，経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり，相手の話を注意して聞いたりし，言葉による伝え合いを楽しむようになる」と明記されている。さらに「言葉」の領域において「言葉の響きやリズム，新しい言葉や表現などに触れ，これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際，絵本や物語に親しんだり，言葉遊びなどをしたりすることを通して，言葉が豊かになるようにすること」が新たに明記されている。また，10月に行った幼児への聞き取り調査では「絵本が好き」という幼児が96%おり，絵本に親しみのある幼児が多いことから，遊びの中で絵本を活用することは効果的であると考える。

以上のことから，リズム感のある台詞や言葉の響きを楽しめるような絵本を活用することによって，言葉や表現を楽しむ中で自分の思いを言葉で伝え合う幼児が育つであろうと考える。

(4) 取り入れたい環境の工夫及び実践

幼児にとっては身のまわりにある自然や物，人など全てが環境であり，心を動かされる体験との出会いは生活の中に多く潜んでいると考える。本研究では，心を動かされる体験を自然発生的なものだけではなく，伝えることや伝え合うことへの意欲や喜びを味わえるような環境構成の工夫を行い，取り入れたい実践を考える（図６）。

環境構成	・幼児のイメージを生かした遊びの展開 ・好奇心を育めるような環境の工夫 ・言葉のリズムを楽しめるような絵本の活用		
保育実践	キーワード	取り組み	期待される効果
	1.イメージ	○「はてなボックス」「視覚的教材」の活用 ・出てきた絵カードからイメージを広げ言葉にして伝える	・理解やイメージがしやすい ・思いつきや気付きを言葉にして伝えようとする ・伝える楽しさや伝わる喜びを実感できる
	2.好奇心	○「はてなボックス」「実物」の活用 ・手触りや嗅覚などの諸感覚を働かせて想像したり伝えたりするやり取りを楽しむ	・好奇心や期待感，高揚感が湧く ・一人の話に皆で耳を傾け，クラス全員で一体感のある遊びとなる ・伝えることや，相手の話を聞くことに夢中になれる
	3絵本	○絵本『ねこのピート』の活用 ・リズム感のある台詞や歌を楽しむ ・友達と相談しながら活動を進めることを楽しむ	・自然と幼児が口ずさみたくなるような台詞や歌がある ・就学を期待させるような内容が年齢に適しており興味関心が湧く ・グループで話し合い，協力する

図６　取り入れたい環境構成の工夫及び実践

Ⅶ　保育実践

1　題材名　「はてなボックス」「絵本『ねこのピート はじめてのがっこう』」の活用

2　ねらい

(1) はてなボックスを活用した遊びの中で，思いやイメージを言葉にしたり，教師や友達に受け止められたりする経験を重ねることで，伝えることの楽しさや嬉しさを味わう。

(2) 絵本『ねこのピート』の主人公になりきり，グループの友達と思いを伝え合いながらイメージを形にしていく経験を通して，言葉でのやり取りの楽しさや共感し合う喜びを味わう。

3　題材について

(1) 本学級の実態

優しく人懐っこい幼児が多い一方で，緊張すると自分の思いを言葉でうまく伝えられない幼児も見られ，言葉にすることへの自信のなさや苦手意識が感じられる。首を振ったり，うなずいたり，見つめ合ったり，微笑んだりなどの身振りや表情で気持ちを伝える姿も大切にしながら，さらに言葉で伝える楽しさを味わえるようになってほしいと考える。

10月に行った幼児への聞き取りアンケートでは，「発表することは好きですか？」との質問に対して約30％の子が，恥ずかしい，照れる，やりたくないなどの理由で「苦手」と答えている。しかし，発表が苦手と答えた幼児に「人と話をすることは好きですか？」と質問すると，「好きな人と話をするのは好き」と全員が答えている。また，保護者アンケートからも「園では静かだが家ではとてもお喋りである」という幼児の姿も多く見られる。

以上のことから，教師や友達との信頼感や安心感を育み，それを土台とした遊び環境の中で，言葉で伝え合う楽しさや喜びを味わえるような経験を重ね，自信へとつなげていく必要があると捉える。

(2) 題材として取り上げた理由

本学級の実態より，人と話をすることは好きであるが，場面や相手が変わることでの緊張感や自信のなさが言葉をつまらせる原因になっている幼児が多いと考えられる。保護者アンケートからも，園では無口だが家ではお喋りだという幼児もみられ，根本的に幼児期の子ども達は，自分の思いを伝えたいという意思があると捉える。そこで，教師との信頼関係や安心感を基盤に，伝えることで認められ褒められるという経験を重ね，個々の自己肯定感を育み，学級全体が思いを伝えることを心地よいものだと感じられるような雰囲気作りを行っていきたいと考える。

以上のことから，言葉を引き出せるような遊び環境を工夫し，思いを伝える経験や伝え合うことで広がる遊びの経験が必要であると考え，題材として「はてなボックス」や絵本から広がる遊びを取り上げた。

「はてなボックス」では，視覚的教材や実物を活用する。そこでは，何が入っているか分からない箱の中を想像し，高揚感や期待感が湧くことで，その気持ちが思わず声に出てしまうであろうと考える。また，感触や嗅覚などの諸感覚を働かせ様々なイメージが湧くことで，教師や友達に伝えたいという思いが育まれ，言葉が促されるであろうと考える。

絵本『ねこのピート』では，リズム感のある台詞やストーリーを活用する。そこでは，ねこのピートに変身しなりきることで，グループの友達同士でイメージを共有し伝え合う場が充実するのではないかと考える。「聞く人」「話す人」の両者の役割や思いやりの心に気付かせながら，思いを言葉で伝え合う幼児を育んでいきたい。

また，小学校就学前の年長児にとって，小学校をイメージし期待が持てるような内容でもあり，発達の段階に適した絵本であると捉えた。

4　検証保育の全体計画

実践	日程	題材名及び調査	ねらい	活動内容	作業仮説
1	11/1（木）～11/22（木）	○聞き取り調査 ○アンケート ○グループ替え －はてなボックスの活用－	・幼児の実態を把握する。 ・幼児の家庭での実態を調査し，保育実践に活かす。 ・はてなボックスに興味を持つ。 ・思いを言葉にして伝える。	・幼児への聞き取り調査 ・担任，支援担任への聞き取り調査 ・保護者へのアンケート調査 ・新しいグループで手遊びをして楽しむ。 ・グループで相談しグループ名を決める。	
2	11/30（金）	○はてなボックスクイズ１ －絵カードの活用－	・絵カードに対するイメージを言葉にすることで，気持ちが伝わる嬉しさを味わう。 ・思い思いに気付きや思いつきを言葉にして伝えることを楽しむ。	＜一斉活動＞ ・はてなボックスを活用し，絵カードを取り出す出題者の言葉をヒントにして何の絵が描かれているかを当てる。 ・絵カードから広がる言葉集めを楽しむ。 ・はてなボックスを改良するアイディアを出し合う。	（1）
3	12/3（月）	○替え歌作り －♪ラーメン体操－ 山本(2000)参考	・替え歌作りを通して話すことが楽しいという気持ちを膨らませる。 ・幼児の姿を認めたり褒めたりすることを通して，「話す人」「聞く人」の役割を意識できるようにする。	＜一斉活動＞ ・「話す」「楽しい」などキーワードをあげながら，替え歌作りを楽しむ。 ・皆で歌うことを話の始まりにすることで楽しい雰囲気を作る。	（1）
4	12/4（火）	○はてなボックスクイズ２ －実物の活用－	・幼児のアイディアをはてなボックスに生かすことによってより興味や意欲を持つ。 ・諸感覚を働かせる遊びを通して伝えたい思いを育む。	＜一斉活動＞ ・前回絵カードだったボックスの中身を実物（野菜や果物，玩具など）に変える。 ・見えない物を触る時の高揚感や期待感から思わず声を出したり，様々な素材の特徴に気付き感じたことや考えたことを伝えたりする。また，その様子を見聞きしている皆も思いを伝え合いながら楽しさを共有する。	（1）
5	12/5（水）	○わらべうた－「はないちもんめ」－	・わらべうた「はないちもんめ」を通して，歌に出てくる「相談する」ことについて考える。	・「はないちもんめ」で遊ぶ。 ・「相談する」ことについて考える。	（1）
6	12/6（木） 12/7（金）	○はてなボックスクイズ３ －グループで話し合おう－	・グループの仲間意識を感じながら互いの思いに耳を傾ける。	＜グループ活動＞ ・グループ毎にクイズの題材探しに出発し，相談したり考えたりする過程を楽しむ。 ・グループ毎に挑戦者となり相談しながら前時同様のクイズを皆で楽しむ。	（2）
7	12/11（火）	○絵本『ねこのピート』 －導入－	・絵本の読み聞かせを通して，絵本の世界を想像しイメージを広げたり，思いを伝えたりすることを楽しむ。	＜一斉活動＞ ・絵本に出てくる歌を一緒に口ずさみながら読み聞かせを楽しむ。 ・グループで相談してやりたいねこのページを選び，皆でねこになりきって読み合わせながら絵本の世界を楽しむ。	（1）
8	12/12（水）	○『ねこのピート』－展開１－	・言葉でのやり取りの楽しさや共感し合う喜びを味わう。	＜グループ活動＞ ・グループの友達同士で思いを伝え合い，なりたいねこのイメージを絵に描いていく。	（2）
9	12/17（月）	○『ねこのピート』－展開２－	・言葉でのやり取りの楽しさや共感し合う喜びを味わう。 （前時の続き）	＜グループ活動＞ ・絵に描いたねこのイメージを，製作して形にしていく（耳，尻尾，楽器，小物など）。	（2）
10	12/19（水） ※本時	○『ねこのピート』－展開３－	・言葉でのやり取りの楽しさや共感し合う喜びを味わう。 （前時の続き）	＜グループ活動＞ ・作った物を身に付けながら，グループでポーズや動きを考える。 ・クラス全員で集まり，各グループが考えたねこになりきりながら読み合わせ，絵本の世界を楽しむ。	（2）
11	12/21（金）	○『ねこのピート』－発表－	・発表することの嬉しさや心地よさ，達成感を味わう。 ・発表会（2 月）への期待を高める。	＜ミニ発表会＞ ・同じ年長児のそら組を観客に招き，ミニ発表会を行う。	（2）
12	1/9(水)～1/16（水）	○グループ替え ○帰りの会 ○聞き取り調査 ○アンケート	・幼児の変容を把握する。 ・聞き取りやアンケートを通して，幼児や保護者の意識の変容について把握する。	・幼児への聞き取り調査 ・担任，支援担任への聞き取り調査 ・保護者へのアンケート調査	

5　本時までの遊びの様子

(1) 検証保育（保育実践５）より

集団遊びから伝え合いを考える

－「はないちもんめ」を通して－

①　手だて

クラス全員で「はないちもんめ」を楽しんだ後，歌に出てくる「相談する」ことについて考える時間を設けた。

②　結果

「はないちもんめ」はこれまでにも遊んだ経験があり，全員参加で楽しむことができ，対戦はとても盛り上がった。ゲームはテンポ良く進み，相談タイムも「○○にしよう」「でもジャンケン強いから△△にしよう」「いいよ」などと相談も二言三言でスムーズに行われる様子が見られた（図７）。

図７　円陣を組む女子チーム

その後，教師は相談する様子をクラス全体で振り返り，遊びの中で何気に行っている「相談すること」や「話し上手は聞き上手」ということわざを紹介しながら「話す人・聞く人の役割」について話し合いを行うと，多様な意見が見られた（図８）。

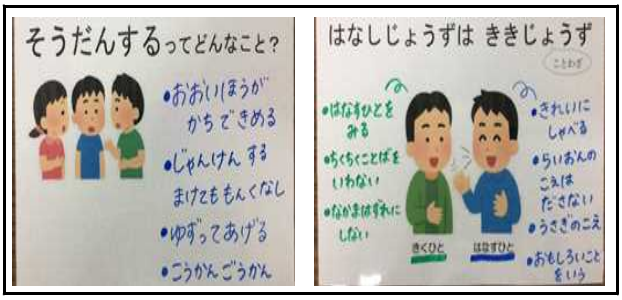


図８　幼児が考えた話し合いカード

③　考察

馴染みのある「はないちもんめ」のわらべうた遊びから「相談する」「話す・聞く」ことについてつなげ考える時間を設けたことで，イメージがしやすく発言を促せたと考える。また，「話す人・聞く人」について幼児自身に置き換えながら話し合えたことで，自分たちができることとして意識できたと考える。

6　検証保育（本時）

保育指導案

平成 30 年 12 月 19 日（水）9:00～9:50

にじ組　男児 13 名(支援学級２名) 女児 13 名 計 26 名

教諭　東　真紀子

(1) 活動名　『ねこのピートになりきって楽しもう』

(2) ねらい　「言葉でのやり取りの楽しさや共感し合う喜びを味わう」

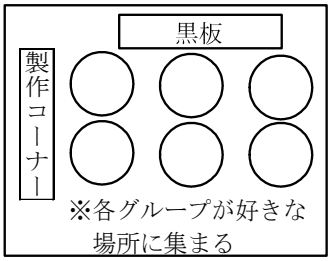
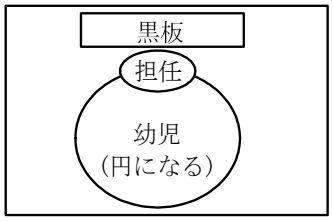
(3) 内容　○グループの友達と思いを伝え合いながら，絵本『ねこのピート』の台詞に合わせたポーズや動きを考える。

○クラス全員で集まり，ねこのピートになりきりながら読み合わせ，絵本の世界を楽しむ。

○工夫したことや楽しかったことなどを発表する。

(4) 展開

時間	○予想される幼児の活動	◎教師の援助　◇環境構成
9:00	○ダンス「ラーメン体操」 うた「秋の空」を楽しむ	◇幼児の大好きなダンスや馴染みのある歌を通して，自然と声を出すことや体を動かすことを楽しみ，また気持ちを和らげリラックスすることにより，自己表現がしやすい環境を整える。
9:05	○発表（３グループ） ○予定，約束事を確認する 黒板 担任 幼児 （６グループ）	◎前時までに作った物を身に付けることで，ねこに変身することを楽しみながら意欲的に参加できるようにする。 ◎発表（作った小物を紹介）は３グループ行う中で，発表スタイルを変化させながら（感想，良い所探し，クイズなど）聞く側にも動きを持たせることで最後まで集中できるようにする。

		◎これまでの検証保育を通して，クラス全体で話し合った「話し上手は聞き上手」「相談すること」などの絵カードを振り返り，グループでの話し合いに向けた約束を再確認できるようにする。 ◎活動の流れを表示し，事前に知らせることで見通しを持ち最後の読み合わせや発表タイムまで楽しみにできるようにする。また，活動終わりの合図（ピアノ）を何の曲にするかを子ども達に決めてもらい意識させることで活動の切り替えがスムーズに行えるように配慮する。
9:15	○グループで作戦会議を行う ・グループで，台詞に合わせたポーズや動きを考える ・どのように発表するかを相談する  	◎グループで話し合いをすることを，「秘密基地はどこにする？」「作戦会議しようね」などと言い換えることで，子ども達の仲間意識やわくわく感を高められるようにする。 ◇発表の仕方の参考となるような表示カードを準備する。 ◎グループを周り，子ども達の考えに共感・褒める・認めるかかわりを積極的に行うことで自信につなげ，言葉でのやり取りの楽しさを味わえるようにする。 ◎「グループのみんなで同じ動きをする」「それぞれが違ったポーズを決める」など，グループで話し合った様々なパターンのアイディアを認めることで，共感し合う喜びを感じられるようにする。また，全体へも紹介することで，他グループのヒントや意欲につながるようにする。 ◎話がまとまらないグループへは最初に踊ったラーメン体操を思い出させるなど，動きを考えるヒントを与え話し合いを最後まで取り組めるようにする。 ◎意見がぶつかる幼児や無関心な幼児などへは個別にかかわり，思いを引き出したり気持ちを代弁したり一緒に提案したりしながらグループ参加を促し，伝えることで得られる楽しさを見つけられるよう援助する。 ◇製作の手直しがしたい幼児が出てくることも予想されるので製作コーナーを用意しておく。
9:25	○片付けを行い， 円になって集まる	◎「時計の針に気付く子いるかな？」「ピアノは何の合図だったかな？」などと投げかけ，幼児自身が気付き主体的に動けるような声かけを行う。 ◇ピアノを活動終了の合図とすることで，素早く集まれた幼児も歌いながら待つことができ楽しい気持ちを継続できるようにする。
9:30	○皆で絵本の読み合わせをする  	◇円になって集まることで気持ちを一つにし，顔や動きを見せ合いながらテンポ良く読み合わせることができるようにする。 ◎お喋りをしたり寝そべったりする幼児へは，「応援してあげよう」「元気に歌えるかな」など肯定的な声かけを心がけ，気持ちよく切り替えられるように促す。 ◎教師自身も幼児と同じ気持ちになって表現することを楽しみ，見本となるようにする。
9:40	○発表（３グループ） ○感想 ・各グループの製作道具かごを準備する（片付け）	◎楽しかったことや工夫したことなど，幼児の気持ちにしっかり耳を傾け受け止めることで達成感を味わえるようにする。 ◎活動を通して全員の発表となるように，前半で発表をしたグループとは別の３グループ（全部で６グループある）に発表させる。 ◎面白いアイディアや次への展開など，幼児の言葉に共感しながら明日への意欲につながるようにする。

Ⅷ　研究の考察

1　作業仮説(1)の検証

一斉活動の場において，幼児の期待感や好奇心を育むような環境構成の工夫をすることによって，思い思いに自分のイメージを伝えることや，教師や友達に自分の思いが受け止められる喜びを味わうことができるようになり「伝えたい」思いを育むことができるであろう。

(1) 幼児の期待感や好奇心を育むような環境構成　－イメージから言葉を引き出す物的環境の工夫－

①　手だて

幼児が遊びに期待感や好奇心が持てるように，中身の見えない「はてなボックス」（図９）や「絵カード」を用意した。絵カードを取り出す出題者は絵から広がるイメージを皆に伝え，回答者はそれをヒントに何の絵が描かれているかを考え当てる中で，言葉を引き出せるようにした。

図９ はてなボックス

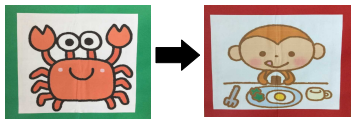
②　結果

ア　検証保育（保育実践２）より

教師が「はてなボックス」を手に取ると幼児はすぐに興味を示し「今から何が始まるの？」「中には何が入っているの？」とわくわくするような言葉が飛び交い多くの視線が集まった。「クイズクイズ！」「何が出るかな？」などの教師のかけ声にのりながら，絵カードが取り出されると，ヒントとなる話にじっと耳を傾けながら何の絵が描かれているかを当てようと積極的に挙手する幼児が多く見られた（図10）。

図10　積極的に挙手する幼児

クイズのルールを理解すると「(出題者を)やりたい」という幼児が次々に現れ，遊びのリード役が教師から幼児へと入れ替わった。出題する幼児も回答する幼児も，イメージを膨らませ言葉を探りながら伝えようとする姿が見られた。また，身近な物を表す絵だけでなく，動きを伴う絵カードを用意しクイズに難易度をつけていった（図11）。



「カニ」　身近な物を表す絵　　「おにぎりを食べているサル」　動きを伴う絵

図11　絵カードの展開

一人で伝えるには難しさを感じた幼児は「お助けマン呼んでいい？」と仲間を呼び，内緒話をするように嬉しそうに集まりながら，ヒントの出し方や伝え方を相談する姿が見られた（図12）。また，絵カードを取り出す際にクラス全員で「10，９，８…」とカウントダウンが始まったり，ヒントが欲しい時に「せーの」「ヒント３」とのかけ声があがったりした。さらに，お助けマンが指名された時は「よっしゃー〇〇さんいけ！がんばってきてね！」とまわりの幼児がお助けマンを応援して送り出すなど，クラスが一体となり，様々な言葉が飛び交うような盛り上がりが見られた。

図12　相談する幼児の姿

③　考察

イメージと言葉のつながりを生かした遊び環境の工夫は「伝えたい」思いを育む上で効果的であったと考える。このことは，教師がはてなボックスを手に取った段階での期待感を感じさせる幼児の言葉や反応，聞く時の静けさや集中力から判断できる。また，出題者と回答者が協力し積極的に考えを出し合う様子から，思い思

いに自分のイメージを伝えることを楽しめていたと判断できる。さらに，難易度の異なる絵カードを用意し，段階を踏んで出題したことは，伝える意欲を湧かせることに効果的であったと考える。このことは，次第に絵カードが難しくなるにつれ，幼児の発想でお助けマンという形に展開したり，かけ声や応援が自然に飛び交ったりと，積極的に参加する幼児の姿から判断できる。

(2) 幼児の期待感や好奇心を育むような環境構成
－諸感覚を働かせる遊びを通して伝えたい思いを育む物的環境の工夫－

① 手だて

幼児のアイディアを生かして改良したはてなボックス（図13）や，クイズに使う野菜や玩具などの「実物」を用意した。見えない物を触る時の高まる高揚感や膨らむ期待感を楽しませたり，素材の特徴を考えさせたりしながら言葉を引き出せるようにした。

図13　改良版

② 結果

ア　検証保育（保育実践４）より

前時のはてなボックスクイズで幼児から出たアイディア(「もっと大きな箱にしたい」「穴を増やしたい」など）を参考に改良した箱を教師が見せると，幼児は「わぁ！早くやりたい！」と目を輝かせた。教師が「昨日と違う所は何かな？」と問うと「分かった！」と気付いたことを次々に発表した。

また，箱の中身を視覚的教材（絵カード）から実物に変化させたことで，穴に手を入れる幼児は「動いたらどうしよう」「噛まれるかな」などとイメージを膨らませソワソワしていた。いざ手を入れると「軽くて，ちょっとザラザラしていて，手で持てるくらい小さくて…」と一生懸命手触りの特徴を言葉にして伝えていた。他児から「においもしてみて」と声をかけられ，鼻をクンクンさせる様子に，まわりの幼児も期待する表情で見つめていた。見ている側にも，穴に手を入れる友達のドキドキ感が伝わり，クラス全体でワクワクしながら言葉のやり取りを楽しむ姿が見られた（図14）。

図14　言葉のやり取りを楽しむ幼児たち

③ 考察

諸感覚を働かせる遊びの工夫は，期待感や好奇心を育むものであり「伝えたい」思いを育む上で効果的であったと考える。このことは，穴に手を入れる前から期待感や不安な気持ちが思わず声に出たり，感触やにおいを伝えるために一生懸命に言葉を探りながら話す姿から判断できる。また後日，家や園で自分たちで工夫を加えてはてなボックス製作を楽しむ姿から，主体的に取り組めた活動であったと判断できる（図15）。

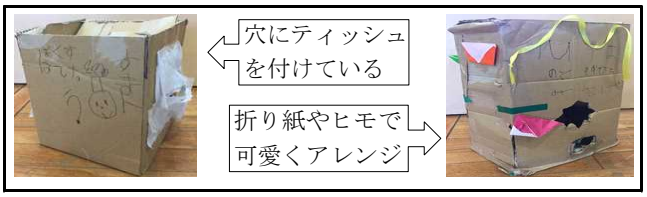


図15　幼児が手作りしたはてなボックス

(3) 自分のイメージを伝えられるような個に応じた援助　－人的環境としての教師の役割－

① 手だて

受容的態度で信頼感・安心感を育み、認める・褒めるなどのかかわりを通して自信を持たせるなど，個に応じた援助を行った。

② 結果

ア　検証保育（保育実践２）より

普段から人見知りがあり，自分の思いを言葉で伝えることが苦手な２名の幼児に焦点を当て，変容をみていく（図16）。

	＜A児＞
幼児の姿	普段から寡黙なA児。一斉活動では集会の場の中にはいるが，興味関心が浅く意欲的に参加することが少ない。そのため集中力が持たず，上の空で無表情であったり，体をくねらせたりしながらつまらなそうに過ごしている。
手だて	普段からスキンシップを図り**安心感**が持てるようにした。**遊びを共有しながら好きなもの等を把握**し，一斉活動の場において，**本児の興味を教材化することで関心・意欲が引き出せる**ようにした。
幼児の変容	はてなボックスクイズでは，一問目に本児の大好きな恐竜の絵カードが出題され，教師のヒントを聞いてすぐに答えに気付くと「分かった」と**目を輝かせ「恐竜！」とハキハキと答えた**。「ヒントをよく聞いていたね」と褒めると「簡単だったよ」と**得意げな表情を見せた**。活動中は**最後まで気持ちを継続し何度も挙手し楽しそうに参加**する姿が見られた。その後も**集会での発表が増え**，普段から**教師によく話しかける**ようになった。
	＜B児＞
幼児の姿	集団を好まず遠くから学級全体を傍観していることが多い。声をかけられると相手を見つめて答えようとしているようだが言葉にするのが苦手であり，相手がじっと聞いてくれることで，耳元に囁くように話をする。決まった当番挨拶は出来るが自ら人前に立つことには消極的である。
手だて	普段から言葉に詰まる時は**教師が代弁**し伝えながら友達との輪を作っていった。一斉活動においては，**事前にスキンシップを図り**「これでどんな遊びができるかな？」と**一足先にはてなボックスを見せ，本児の考えを認めたり共感したりして，自信や興味を持たせる**ようにした。
幼児の変容	数名の幼児が出題者をする姿を見た後に，やりたいと**自ら挙手**した。教師はいいチャンスだと思い指名すると，**やったと思わず手を叩きながら早足に前に出てきた**。ヒントを出す時は教師への耳打ちだったので「せーの」と声をかけ背中を押してあげると「柄のあるねこです」と**小声で皆に伝える**ことができた。まわりの幼児がその言葉に反応を示したことに**ホッとした表情をみせ，正解が出るとさっきより少し大きな声で「当たりです」と返事をした**。

図16　個に応じた援助（Ａ児・Ｂ児）

③　考察

人的環境としての教師の援助において，受容的態度や認める・褒めるなどの自己肯定感を育めるような援助を行ったことは「伝えたい」思いを育む上で効果的であったと考える。

このことは，普段から積極的にＡ児とのスキンシップを図ることで安心感を育み，さらに本児の興味を教材化したことで，参加したいという意欲を湧かせ，積極的に回答する姿につながったと判断できる。

また，一斉活動の前にＢ児とスキンシップを図り，教師が本児の考えを認めたり共感することで，自分の思いを受け止められる喜びを味わえたことが自信となり，自ら人前に立ち伝えられることを喜ぶ姿につながったと判断できる。検証保育前後の聞き取り調査からも気持ちの変化が見られる（表４）。

表４　「発表することは好きですか？」

	検証保育前　10 月	検証保育後　１月
Ａ児	得意だから好き	楽しいから好き
Ｂ児	嫌いだから やりたくない	苦手だったけど発表するのが何だか楽しくなってきたから，ちょっと好き

２　作業仮説(2)の検証

グループ活動の場において，幼児との信頼感や安心感を育むような教師の援助を工夫することによって，友達同士で認めたり折り合いをつけたりしながら言葉でのやり取りの楽しさや，共感し合う喜びを味わうことができるようになり，自分の思いを言葉で伝え合う幼児が育つであろう。

(1) 幼児との信頼感や安心感を育むような教師の援助　－グループ活動への展開－

①　手だて

はてなボックスクイズの展開でグループ活動を取り入れ，共通の目的を持たせることで，各グループで話し合いの場を作るようにした。

②　結果

ア　検証保育（保育実践６）より

グループに分かれ，教師が用意した宝袋を持ち，はてなボックスの中身探し探検へと展開した。教師が「他のグループには内緒だよ。宝探しに行ってらっしゃい」と声をかけると，「秘密の宝探し探検」にワクワクし，グループでヒソヒソと会話を交わしながら教室内を動きまわり宝探しを楽しんでいた（図17）。

図17　秘密の宝探し探検

③　考察

グループ活動において，共通の目的を持たせたり「宝探し」「探検」など高揚感を湧かせるような教師の声かけを行ったりすることによって，自分の思いを言葉で伝え合う姿を助長でき効果的であると考える。こ

のことは，グループ活動で少人数になったことで仲間意識を高め，胸を躍らせる気持ちが表情や言動に表れ，言葉でのやり取りを楽しんでいる様子から判断できる。検証保育後，保護者から次のような感想も聞かれた(表５)。

表５　保護者アンケートより

・「今までは何かをしながらで話を聞いているのか分からない時もあったが，今は顔を見て聞く姿が見られるようになった」
・「家族で相談中にそれぞれの話を真剣に聞くようになった」
・「遊びを通して相談する事で物事を解決することを覚えたらしくすごく良い機会だと思った。兄弟げんかもこれからは相談することで少なくなるといいな」

(2) 幼児との信頼感や安心感を育むような教師の援助　－絵本を活用した遊びの展開－

① 手だて

絵本『ねこのピート』を活用し遊びが展開していく中で，話し合う機会を多く作る。

② 結果

ア　検証保育（保育実践７～９）より

伝え合う姿を視点に置き「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を参照し，遊びの様子を下記にまとめた（図18)。

＜絵本の世界を楽しむ（10.豊かな感性と表現）＞

「〇〇かなり最高♪」と絵本の台詞を思い出してはリズムにのって口ずさんでいた。男児たちは「焼きそばかなり最高」などと替え歌を作り流行のＵＳＡのダンスのポーズもつけながらアレンジして楽しんでいた。また「私，給食ピートするね」「僕は算数ピートやる」などと絵本の役になり遊ぶ様子も見られた。

＜主体的な学びの芽生え（３.協同性）＞

クラス全体に声をかけると皆でやりたいと興味を示し，クラスでの遊びに変わっていった。

＜伝え合い・主体的な学び（６.思考力の芽生え９.言葉による伝え合い）＞

グループに分かれると「何ピートにする？」との相談タイムが始まり，イメージを伝え合いながらピートの絵を描いたり，耳や尻尾を作ってピートに変身したりと，楽しんでいた。

＜自己表現（10.豊かな感性と表現）＞

ピートに変身した皆を集めた。１つのグループが「良い姿勢はピートでやろう！」と楽しそうに話し始めると，他グループも連鎖して「どんな返事にする？」「強そうなニャーにしよう」などと話し合いが広がっていった。教師が「〇〇ピートさん」と呼ぶとグループ毎に表情豊かな「ニャオ」の返事が聞かれ猫のポーズもしながら成りきって楽しんでいた。

＜伝え合い（９.言葉による伝え合い）＞

紹介タイムでは「僕たちは図書室ピートだから本を作りました」「私たちは耳を三角に切って虹色にしました」と話し合った内容を発表することができた。「みんなと相談することが楽しかったです」との感想も聞かれた。

図18　『ねこのピート』を活用した遊び

③ 考察

幼児の好きな絵本を活用し，共通の目的を自分たちで見出し，実現する喜びを味わえるような環境作りや援助を行うことは，自分の思いを言葉で伝え合う幼児を育む上で効果的であると考える。このことは，「グループで相談して役を決める→イメージを伝え合い，ねこの絵を描く→協力して絵でイメージしたものを製作する→製作したことを発表する→クラス全体で絵本の読み合わせを楽しむ」のどの場面においても活発なグループの話し合いが行われ，共感し合う喜びを味わうことができ，言葉を含む表現を楽しんでいる様子が多く見られたことから判断できる。また，幼児の聞き取りアンケートからも「人と話をするのが好き」と答えた幼児が増えており（図19)，回答の理由からも言葉でのやり取りの楽しさを感じている様子が見られた（表６)。

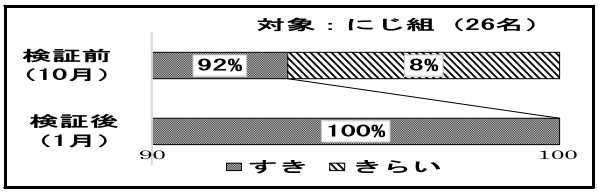


図19　「人と話をすることは好きですか？」

表６　幼児の回答

【嫌い→好きに変わった幼児】

10 月 【嫌いと答えた理由】	1 月 【好きと答えた理由】
・喉が枯れるから ・お話が長くなるから	・面白いことが聞けるから ・話していると楽しいから

【どちらも好きと回答した幼児】

10 月 【好きと答えた理由】	1 月 【好きと答えた理由】
・楽しいから ・なんか好き 話し合うことをイメージできるようになり具体的な理由が言えるようになった	・いい話が聞けるから ・友達と仲良くできるから ・笑わせてくれるから ・聞いてくれる人が優しいから

(3) 個に応じた援助　－様々な役割を果たす－

① 手だて

褒める，役割を与える，代弁するなど場面に応じた教師の援助を行った。

② 結果

ア　検証保育（保育実践７～10）より

グループの名前決めの様子も含め，検証保育前後のＣ児の変容をまとめた（図20)。

	C児の姿　　教師の援助
<10月> グループの名前決め	男児が決めた名前が気に入らないが嫌と言えずごり押しされそうになった所，教師がC児の気持ちを確認し「C児は犬グループがいいそうだよ」と代弁し「どうやって決めようか?」とグループに投げかけた後，話し合いが再開。C児は自分の意見を通したくて黙ったままムスッとし，男児の意見には首を縦に振り嫌だという気持ちを意思表示し続けた。男児の方が根気負けして「じゃあ犬（C児の意見）でいいよ」となった。

↓

保育内容	『ねこのピート』
C児の姿	話し合いの場では，まわりの意見に耳を傾けず，他児の意見には「嫌」の一点張り。話が進まずグループ全員が困った顔を見せた。
教師の援助	グループ皆に「いいアイディアが沢山出ているね」と意見を出し合えたことを褒め，「リーダーできる人？」と声をかえると，進んで引き受けたC児にリーダーの役割を与えた。
C児の変容	・リーダー役に意欲を示し，自分の思いを通すという姿からグループの意見をまとめようとする姿に変わっていった。 ・「○○だから○○がいいんじゃない」と理由を加えて考えを述べたり「こうするのはどう？」と新しいアイディアを出したりと言葉が次々に出てきた。グループ全員で伝え合うことを楽しみ，各々の意見を合体させるような形で話しがまとまった。

↓

	C児の姿　　教師の援助
<1月> グループの名前決め	花の名前で決めることになりC児が「モスローゼがいい」と言ったのに対し「ホウセンカ」「たんぽぽ」と意見が分かれていた。検証保育で自分たちで考えた「相談カード」を見に行き，「どの方法で決めようか?」と話し合った後，すぐに「先生！たんぽぽに決めたよ」と嬉しそうに報告に来た。「どうやって決めたの？」と教師が尋ねると「(たんぽぽと提案した幼児が) 困っていたから，残りの３人で相談カード見てゆずってあげようって決めたんだ」とスッキリした表情で話してくれた。教師はグループ全員の優しい気持ちを褒めてあげた。

図20　C児の育ち

③　考察

伝え合いの場において，教師が代弁する，褒める，役割を与えるなどの様々な役を果たしながら援助を行うことは，自分の思いを言葉で伝え合う幼児を育成する上で効果的であると考える。このことは，C児がリーダー役を任されたことをきっかけに言葉が増え，周りのことも気にかけながら行動できるような変容が見られたことから判断できる。グループの名前決めの場面でも検証保育前後では，相手の話を聞こうとする姿勢や譲ってあげる気持ちに変化が見られた。また，話し合いのきっかけとなった「相談カード」は以前の検証保育の中で「ジャンケンする，多い方が勝ち，譲る」など自分たちで作ったルールだったからこそ納得し解決方法の手だてとすることができていたと考える。

また，他児からも「伝え合うことが楽しい」と感じられるような感想が多く聞かれ（表７），検証保育全体を通して，友達同士で認めたり折り合いをつけたりしながら言葉でのやり取りの楽しさや，共感し合う喜びを味わうことができたと判断できる。さらに，解決策まで見通せるようになったことで，自分の思いを伝えるだけでなく，相手の思いを受け入れる気持ちが育まれたと考える。

表７　検証保育後の幼児の感想

・「相談タイムってお喋りすることと同じだから楽しいし簡単だね」
・「友達の気持ちも考えるようになったよ」
・「一人より皆で選ぶのが楽しい」
・「決めるまで時間はかかったけど皆と話している時が楽しかった」
・「男の子が（意見を）譲ってくれて嬉しかった」
・「譲ってあげたら気持ちよかった。相手の意見もいい考えだなぁと思えてきた」
・「皆の話し合いで決めるのが面白かった」
・「友達と相談してうまくまとまったことが良かった」

３　本研究を通して

本研究は，心を動かされる体験を通して，自分の思いを言葉で伝え合う幼児を育成することを目的に行った。10月と１月に行った幼児への聞き取り調査では「発表することが好き」という幼児が増えた（図21）。嫌いと答えた２人も「友達と一緒なら頑張れる」「恥ずかしいからいっぱい練習する」と前向きな姿勢が感じられた。

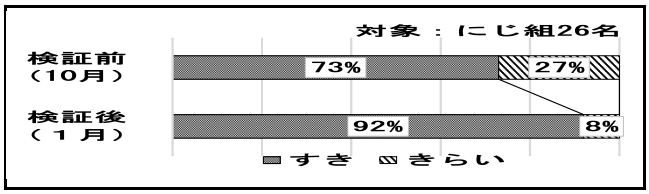


図21　「発表することは好きですか？」

また，５月と１月の帰りの会での当番挨拶の様子では，「落ち着いた様子で発表する」幼児が増えた（図22）。このことは，検証保育を進めると同時に普段からの積み重ねも大事な要因であったと考える。さらに，５月に返答に困っていた幼児２人に対して，同じ質問を比較検討した結果，発表内容に変化が見られた（表８）。

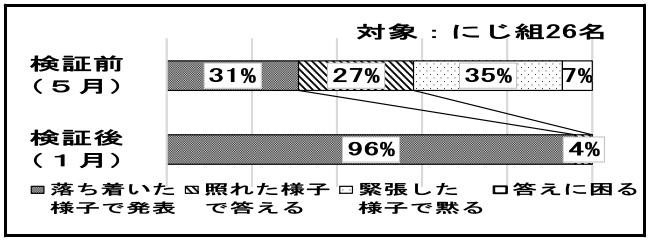


図22　５月と１月の発表の様子

表８　質問「今日楽しかったことは何ですか？」

	検証前（５月）	検証後（１月）
Ｄ児	「寝坊した」	「今日楽しかったことはお兄ちゃん達と一緒にムーチー作りをしたことです」
Ｅ児	「分からない」	「今日嬉しかったことはグループ替えで新しいグループが決まったことです」

以上のことから，研究仮説の有効性が示され，遊びを通して育まれた「伝え合う」ことへの楽しさや自信が，集団生活の様々な場面で，自分の思いを言葉で伝え合う幼児の姿につながっていると考える。

Ⅸ　研究の成果と課題

１　成果

(1) 心を動かされる体験が伝えたいと思う気持ちを育み，自分の思いを伝え，受け止められる喜びを味わえたことで，伝えることを楽しむ幼児が増えた。

(2) 共通の目的を持つことで，幼児は認めたり折り合いをつけたりしながら共感し合う喜びを味わうことができ，言葉による伝え合いを楽しむ幼児が増えた。

(3) 検証保育を通して，保護者アンケートからも言葉の面で子どもの成長を感じるとい声が聞かれ，伝え合う姿に変容が見られた。

２　課題

(1) 相手に分かるような話し方を身につけさせるための教師の援助の工夫

(2) 身近に起こる心を動かされる体験に目を向け，伝え合う経験を日々つみ重ねられるような環境構成の工夫

おわりに

本研究を通して，幼児にとっての伝える手段は言葉だけではなく，身振りや表情なども大事な表現であり，全てを受け止める教師の受容的態度が，幼児に安心感や自信を育み，「自分の思いを言葉で伝える」という次の段階につながっていくのだと実感しました。

検証保育では，幼児の興味関心や発想を生かしながら遊びを展開できるような環境構成や援助を行ったことで，好奇心をもち伝えることを楽しむ幼児の姿が多く見られ嬉しく思いました。

また，共通のイメージや目的を見出し遊びに没頭できるような工夫を行ったことで，言葉での伝え合いが広がり個々の育ちを感じることもできたことは私にとって大きな喜びでした。幼児にとって楽しかった経験が自信となり，伝え合うことを通して，幼児同士のかかわりがさらに深まっていくと嬉しいです。半年間の研究で学んだ理論や実践を，まわりの先生方とも共有しながら，今後の保育にも生かしていけるよう努めていきたいと思います。

研究期間中，また，入所前研修より多くのご指導ご助言をいただきました浦添市立教育研究所の長濱京子所長をはじめ研究所の職員の皆様，検討会や検証保育でご指導ご助言いただきました平良奈津子指導主事，牧港幼稚園の小橋川泉副園長，浦添市教育委員会の諸先生方に深く感謝申し上げます。

最後に，快く研究所へ送り出して下さいました神森幼稚園の金城聡園長，励まし協力して下さいました先生方，第47期長期研究員として共に励み支え合った研究員に心より感謝申し上げます。

【主な参考・引用文献】

・幼稚園教育要領　文部科学省　フレーベル館　2017 年
・幼稚園教育要領解説　文部科学省　フレーベル館　2018 年
・幼稚園教育要領ハンドブック　無藤隆　学研　2018 年
・保育に役立つ！子どもの発達がわかる本　金子龍太郎　吾田富士子　ナツメ社　2011 年
・ことばをはぐくむ　中川信子　ぶどう社　1990 年
・児童心理　自己肯定感を育てる　金子紀子　金子書房　2014 年
・幼児教育じほう　全国国公立幼稚園・こども園長会　2018 年
・５歳児・ことばから文字へ　保育実践研究会　チャイルド　1986 年
・「伝え合う力」を育てる指導細案　山本章　明治図書　2000 年
・小学校学習指導要領解説　国語編　文部科学省　東洋館　2018 年